

「北のカナリアたち」 ◆◆◆◆

2012（平成24）年11月16日

鑑賞<梅田ブルク7>

監督：阪本順治

原案：湊かなえ『往復書簡』（幻冬舎文庫刊）

川島はる（小学校教師）／吉永小百合

川島行夫（はるの夫）／柴田恭兵

阿部英輔（元敏腕刑事）／仲村トオル

堀田久（はるの父親）／里見浩太郎

鈴木信人（東京のとび職人）／森山未来

戸田真奈美（夫とサロベツ原生花園勤務）／満島ひかり

生島直樹（札幌の貿易会社勤務）／勝地涼

安藤結花（札幌の幼稚園の教諭）／宮崎あおい

藤本七重（稚内の造船所の溶接工）／小池栄子

松田勇（島の警官）／松田龍平

鈴木信人（20年前）／小笠原弘晃

戸田真奈美（20年前）／渡辺真帆

生島直樹（20年前）／相良飛鷹

安藤結花（20年前）／飯田汐音

藤本七重（20年前）／佐藤純美音

松田勇（20年前）／菊池銀河

2012年・日本映画・130分

配給／東映

<『キューポラ』から50年！複雑な役柄に挑戦！>

平成24年11月から「日活100周年記念企画 吉永小百合、私のベスト20 DVDマガジン」が発売されることになり、私は早速その創刊号を購入したが、当然それは『キューポラのある街』（62年）（『シネマルーム21』81頁参照）。あの時の吉永小百合は何とも若々しく魅力的な17歳だったが、2012年の今はそれからちょうど50年を経たことになる。その吉永小百合が、湊かなえの『20年後の宿題』が収録された『往復書簡』を元にした、ちょっと複雑な役柄に挑戦！

『北のカナリアたち』というタイトルどおり、本作は北海道の離島を舞台としてくり広げられるはる先生と分校で学ぶ6人の生徒たちの20年後の現在と過去を描くもの。「ある事件」の発生によって、父親の堀田久（里見浩太郎）を島に残し分校を追われるように去っていった川島はる（吉永小百合）は、図書館司書を定年退職した今、刑事の訪問を受けていた。刑事の口から、かつての教え子だった鈴木信人（森山未来）が殺人罪を犯し、逃走中であることを告げられたはるは、矢も楯もたまらず再びあの島へ。しかし、なぜはるはそこまでの行動を？島で出会うことになるかつての教え子たちは、それぞれ今どんな生活を？そして、あの時は互いに語れなかった、心の奥底に秘められたそれぞれの思いとは？

パンフレットにも書いてあるように、近時の吉永小百合主演作である『北の零年』（05年）（『シネマルーム7』268頁参照）、『まぼろしの邪馬台国』（08年）（『シネマルーム21』74頁参照）、『おとうと』（09年）（『シネマルーム24』105頁参照）はいずれも吉永本来のキャラである「清く、正しく、美しく」を前面に押し出したものだったが、本作のはるはそれらとはかなり異質な役柄に挑戦！さあ『キューポラ』から50年。67歳になった吉永が6人の若手芸達者を相手に、いかなる獅子奮迅の働き（演技）を？

<6人の若手俳優は芸達者ばかり！>

本作は鈴木信人が殺人事件を犯し逃走中という問題提起からスタートするが、それは話のきっかけにすぎず、ストーリーの本筋ははるが教師をしていたときに島で起きた「ある事件」をめぐる今と昔の物語。本作では小学生時代を演ずる6人の子供たちがすばらしい歌声を聴かせてくれるが、子供たちにそんな才能があることを見出したのははる。しかし、狭い島の村社会の中では子供たちは、親たちが持つさまざまな確執や対立から逃れることができなかつたのは仕方ない。そんな中、独唱を担当することになった安藤結花（飯田汐音）と、自分の父親が結花の母親の店に入り浸っていた生島直樹（相良飛鷹）との間でケンカが発生。さらに子供たちを仲直りさせるため、はるの夫・川島行夫（柴田恭兵）の発案で開いたバーベキューで起きた結花の自殺騒動の中、結花を助けようと海に飛び込んだ川島が死亡してしまったから大変。さらにその時、なぜかはるは敏腕の刑事だったが、担当した事件が原因で心に深い傷を負い、その後島に赴任していた刑事・阿部英輔（仲村トオル）と密会（？）していたことがわかったため、それが島中の噂になり、はるは島にいられなくなってしまうことに・・・

刑事の訪問を契機として再び島に足を踏み入れたはるが最初に再会したのは、夫と共にサロベツ原生花園で働いている戸田真奈美（満島ひかり、渡辺真帆）。真奈美は唯一人はる先生と20年間連絡を取り合っていたから、この真奈美を通じてはるは次々と札幌の貿易会社に勤めている生島直樹（勝地涼、相良飛鷹）、札幌で幼稚園の教諭をしている安藤結花（宮崎あおい、飯田汐音）、そして稚内の造船所で溶接工として働いている藤本七重（小池栄子、佐藤純美音）や、警官となり、今もなお島に残っている松田勇（松田龍平、菊池銀河）と再会することになる。本作のストーリーは、はるがかつての教え子たちと一人一人再会し、20年前の「ある事件」を互いに振り返ることによって明らかになっていくそれぞれの思いを見せていくことで成立しているが、それを吉永小百合と6人の若手俳優たちが見事に演じている。というより、それぞれの対話の中で主体的に語るのは若手俳優の方で、吉永はむしろ受け手になっている方が多い。本作中盤は、吉永と若手俳優たちとのそんなやりとりをしっかりと味わいたい。

<子供たちはなぜ歌を忘れてしまったの！>

はるが教えることになった分校の生徒は小学校3～5年の男3人（鈴木信人、生島直樹、松田勇）と小学校4、5年の女3人（安藤結花、戸田真奈美、藤本七重）の計6人。彼らに共通しているのは意外にもみんな歌が上手だったことだけで、その育ちや性格は大違い。しかし、小さい村の中で良き先生に恵まれた6人の子供たちの社会だからみんな仲が良いかという、決してそうではない。6人の子供たちの間に嫉妬心や主導権争いが生じたのは、合唱大会を前に独唱を担うことになった結花に対する真奈美の嫉妬心からだ。さらに、前述のとおり結花と直樹の親同士の確執によって、直樹が結花を突き飛ばすという事件も発生。6人の中では1人だけ小学3年生の下っ端で、大声で泣くことしかできないようにみえた信人（小笠原弘晃）が実はすばらしいボーイソプラノの持ち主であることを発見したのははるの功績だが、信人ははるを母親のように慕っていただけに、はるが男と密会していることを知ると・・・

本作の撮影は真冬と夏の両方で行われたらしい。いくら北端の島でも夏ともなれば美しい草花が咲きほこり、美しい風景を見せてくれる。そんな中、はる先生の指導の下で、6人の子供たちが歌う「この広い野原いっぱい」（作詞：小園江圭子、作曲：森山良子）の美しい歌声は魅力いっぱいだが、なぜ子供たちは「歌を忘れたカナリア」のようにそんな歌を忘れてしまったの？本作は「あの事件」をめぐる、はると6人の生徒たちそれぞれが心の奥底に持っていた思いが、一つ一つ解きほぐされていく物語だから、犯罪ミステリーの謎解きを楽しむような感覚でそれを味わいたい。

<吉永小百合と高倉健はあくまで別格、だが・・・>

久々の健さんこと高倉健主演の『あなたへ』（12年）の評論で、私は「吉永小百合と健さんはあくまで別格！」との小見出しで、「健さんの持ち味は『男臭さ』と『寡黙さ』だが、本作でも降旗康男監督はいかなくその魅力を発揮させている。80歳を超えて前者の魅力は多少薄れているかもしれないが、後者の魅力は年をとるとともに、より増しているのでは・・・」と書いた（『シネマルーム29』210頁参照）。アメリカでは『グラン・トリノ』（08年）（『シネマルーム23』48頁参照）を最後に、今後は監督業のみに専念すると宣言（？）していたクリント・イーストウッドが、その公約をひっくり返すかのように『人生の特等席』（12年）に主演し、大リーグの老スカウト役という「はまり役」を演じている、らしい。そういう意味では前述のように、『北の零年』『まぼろしの邪馬台国』『おとうと』と続けて「清く、正しく、美しく」の「はまり役」を続けてきた吉永小百合が、分校の先生でありながら不倫（？）を働き、結果的に夫を死に追いやることになる（？）本作の役柄に挑戦したのは意外だが、本作はやはり「吉永小百合はあくまで別格！」と思えるつくりになっている。

もっとも、芸達者な6人の若手俳優たちは小学生時代と現在の20年の差が歴然としているが、吉永小百合の場合はその差があまりつかないのが難点。もちろん、図書館司書を定年退職する吉永小百合は年齢的に充分フィットしているが、離島に赴任してきた時の20年前の姿はさすがに少ししんどい。明るい服装や髪型で若き日の先生になりきろうとしているが、やはり少しムリがあるのでは？いやいや、サクリストとしてはそんな本音を語ってはダメ！吉永小百合と高倉健はあくまで別格！そんな声が聞こえてくるが、やっぱり・・・